

NEWS *RRM* 〔ニュース〕 Regional Resource Management



明治二年の地域資源マネジメント

教授 中井 淳史

このところ、桜井勉という人の業績を追いかけている。出石藩の出身で、明治期に官僚として活躍し、官界を辞したのちは故郷で文筆をことして昭和初頭まで生きた人物だ。出石藩や豊岡藩は小藩にもかかわらず、新政府で官僚となった人物がめだつ。もともと、藩閥の壁に阻まれたか、位人臣を極めた者は現れなかったが（とはいえ、加藤弘之や濱尾新は日本史の教科書にも名をのこす人物だ）、実務派として縁の下で活躍した人々が多かった。桜井もその一人である。近代日本の諸制度が整えられる過程で但馬の人びとが果たした役割は、決して小さくはなかったのだ。

明治一（一八七八）年、桜井は内務省地理局長に就任した。当時の地理局は、地租賦課の根本資料となる地籍作成が主要業務であった。殖産興業をはじめとする近代化政策で莫大な費用を必要とするうえに、西南戦争で多額の戦費を消した政府にとって、歳入増加は喫緊の課題であったからである。桜井は財政再建の切り札として官有林の可能性に目をつけ、専門部局の新設を建白した。翌年、桜井は新設された山林局の局長に転じた。

その在任は一年に満たなかったが、桜井の功績は注目に値する。その最大は、約七一〇万ヘクタール（日本の森林面積の三割程度）あった官有林の、伐採―造林―保護管理の制度を設計した点にある。科学的知識に基づき計画的に伐採し、効率的に運搬・売却する方策を整え、そして計画的な植樹をおこなって保全するしくみである。

また、桜井は専門家を育てる教育にも目を

向けた。風土適性に応じた樹種選定や、科学的な栽培・植樹を研究する樹木試験場を東京に設置した。さらに日光や木曽、大台ヶ原など著名な森林地に山林学校の設立を構想した。これは実現しなかったものの、明治一四年には桜井らの肝いりで、林学の研究振興をはかる林学協会が設立された。

当時、民有林では乱伐がすすみ、各地ではげ山があらわれていた。「民林ノ衰残ハ：極度ニ達セントス」（「山林局務引継書」とみた桜井は、全国の山林の保全をも視野に入れた。民有林の保護統制こそが、国土全体の保全につながるとした彼の考えは、明治三〇年に森林法制定として結実した。歳入増加という切実な課題が発点にあったとしても、山林を有限の資源とみすえ、その利用をはかりつつ保全にも目を配り、同時に林業の科学的な知識や技術を普及せんとする桜井の構想は、まさに資源のワイズユースにはかならない。

林政上の業績だけにとどまらないのが、この人物の面白さである。二〇年近くに及んだ故郷出石での晩年は、決して悠然とした「隠居」生活ではなかったようだ。小藩出石から雄飛した大先達として、また政官界に精通した人物として、地元社会で隠然たる影響力を持っていた。同郷の先輩―後輩というネットワークの要として、桜井は但馬近代史の随所に顔を出す。山林局長としての仕事を「人と自然の関わり」を考える試みとするなら、こちららさしずめ「人と人との関わり」か。どちらも、地域資源マネジメントの要諦であることにはまちがいない。だからこそ、桜井勉という人物が気になるのである。

Information

博士前期課程 C日程入試
博士後期課程 第2回入試

Information 01

博士前期課程C日程入試(全日程を合わせて定員12名)および博士後期課程第2回入試(全日程を合わせて定員2名)を、平成31年3月3日(日)に実施いたします。試験は専門試験(小論文)と口述試験、会場は豊岡ジオ・コウノトリキャンパス(豊岡会場)と、神戸商科キャンパス(神戸会場)から選べます。

入 試 日：平成31年3月3日(日)
願書受付：平成31年2月6日(水)～2月19日(火)

※事前に受験資格審査が必要な場合は、平成31年1月20日(日)～2月2日(土)に審査書類をご提出ください。

地域資源マネジメント研究科大学院生による研究報告会
～但馬の地域資源を考える～

Information 02

本研究科での研究成果を広く知っていただくために、大学院生による研究報告会を実施します。興味のある方ならどなたでも参加いただけます。ぜひお越しください。

日 時：平成31年3月10日(日) 13:00～17:00(開場12:30)
会 場：豊岡稽古堂交流室3-1
(豊岡市役所敷地内、大開通り正面：豊岡市中央町2-4)

内 容：分野別発表、パネルディスカッション
参加費：無料
※参加希望者多数の場合は、先着100名までとします。
申込締切日：平成31年3月4日(月)
※但し、定員に満たない場合は当日まで受け付けます。

【お問い合わせ】 各催しの詳細はウェブサイトをご覧ください。あるいはメール、電話にてお気軽にお問い合わせください。

大学院生による研究報告会および
サイエンスカフェRRMの申込先

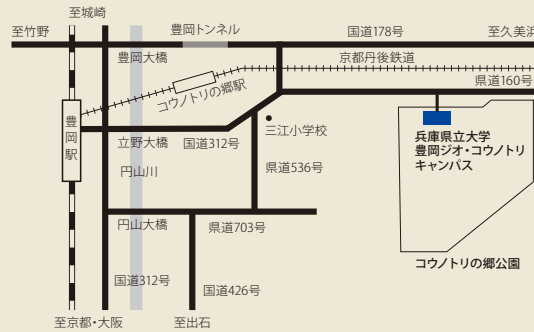
兵庫県立大学 豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
E-mail:rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp Tel:0796-34-6079

氏名、所属、住所、メールアドレス、電話番号をお知らせください。また、件名には参加希望の催物名(「大学院生による研究報告会参加希望」もしくは「サイエンスカフェRRM参加希望」)を明記してください。



兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 RRM

〒668-0814 豊岡市祥雲寺128
(兵庫県立コウノトリの郷公園内)
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
Tel. 0796-34-6079 Fax. 0796-22-5200
E-Mail: rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp
<http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm/>



【写真提供】

松原 典孝：桜井勉生家跡の樹木
西垣 義嗣：盆踊り
磯 謙一郎：風鈴
岡山 慎：集落広場
山本大寛：焼杉板のまちなみ
下中 智晃：BBQ会
山室 敦嗣：DIG(演習)



UNIVERSITY OF HYOGO

発行：2018年 12月

修了生 在学生 から

TOYOOKA GEO & KOUNOTORI CAMPUS RRM INTRODUCTION



保存が求められる但馬の風景（竹野の焼杉板のまちなみ）

最後に地域資源マネジメント研究科のさらなる発展と、同窓生の皆さんの活躍とご健勝を祈念申し上げます。



歓迎BBQ会の準備の様子

決めて取り組んでいます。より良い環境づくりのため院生会は、これからも活動していきます。



地域資源マネジメント教室でのDIGの様子

午後からのフィールドワークでは専門的な解説だけでなく、参加者から地元の方ならではの話を聞くことができました。最後のグループディスカッションでは、地元外の参加者による「外からの視点」を加えながら意見が交わされました。災害の大型化、巨大地震や火山噴火が危惧される今日、災害大国に住む私たちは「災害にどう向きあうのか」が問われていると言えます。今こそ、災害という視点から地域を見つめ直す時ではないでしょうか。

円山会だより
地域資源マネジメント研究科同窓会
〳〵円山会〳〵の紹介と今後の展望

平成30年度の総会において、初代会長の得田雅人さんの後を引き継ぎ、会長に就任することになりました。会長に選任されたからには、微力ではありますが、皆さまのご指導、ご支援を頂きながら、努力してまいりますので、どうぞよろしく願いたします。

円山会は、平成28年3月に研究科第1期修了生の皆さんにより設立された同窓会であり、今年度3年目を迎えました。設立間もないということもあり、現在の会員数は13人で、定期総会のほか、不定期で集い、研究科で過ごした思い出や近況を語り合っています。

人口減少や環境の変化など、昨今の地域を取り巻く情勢の変化は、誰も経験をしたことがない時代の訪れと言え、その対処が求められています。地域資源マネジメントを学んだ我々円山会といたしましては、同窓生同士の親睦だけにとどまらず、地域とのかかわりを持ち、地域社会に貢献していくことも大きな役割であり、今後そうした取り組みを進めたいと思っています。このことから、これまで以上に研究科と円山会との繋がりを大切にし、相互の協力を通じて、円山会の活動の充実に繋げたいと考えております。

第2期円山会会長
小田垣 聡 〔2016年度修了〕
所属…豊岡市役所

2018年度院生会会長
今津 瞬 〔博士前期課程1年〕
2017年度院生会会長
下中 智晃 〔博士前期課程2年〕

地域資源マネジメント研究科の院生会は、早くから主体的な研究生活の向上に取り組めるように、新入生がメインとなって運営されており、博士前期課程1年全員が何等かの役職に就いています。今年度は会長が1人、副会長が2人、会計が1人、会計監査が1人、親睦部長と広報情報部長が2人ずつの組織構成です。また、専攻分野に関係なく協力できるよう、人員が2人になる役職は別分野の院生で受け持つようにしています。

院生会の役割は院生がより良い学生生活を送れるように、また、より良い環境で研究ができるように努めることです。そのために年度ごとに様々な活動を行っており、4月には新入生と在学生との懇親会を深めるために「歓迎BBQ会」を開催しました。院生会が買い出しから準備まで協力して行い、地元農家が生産した食材や院生が自ら調達してきた材料を使い、文字通り「地産地消」を体感できた会となりました。また、7月には年に一度行っている大学側との懇談会があり、そこで院生会の代表として会長と副会長が院生からの要望を伝えました。このほかにも、院生会のコピー機の管理など役割を決めて取り組んでいます。より良い環境づくりのため院生会は、これからも活動していきます。

研究科の取り組み紹介
第2回地域資源マネジメント教室
沿岸・中山間地域における自然災害と地域資源マネジメント
正木 詔一 〔博士前期課程2年〕

10月13日（土）、地域資源マネジメント教室を兵庫県香美町（香住）で開催しました。今回のテーマは、沿岸と中山間地という異なった特性を持った地域における災害を考えるものです。

講義に続きDIG（Disaster Imagination Game）を行いました。DIGは「自分たちの住む地域を、災害という観点で構造的にとらえる」ため、白地図上で地域の脆弱性、過去の被災状況、要支援者、災害時に役立つ人材やモノなどを話し合う演習です。私が参加したグループは、行政職員や町議会議員、学校の先生など、比較的地域に関心の高い方々が集まり「面白みのないものになるのでは」と危惧していました。しかし、各自の被災体験や危機意識を共有し、高校生の参加者に昔の様子を教え、その一方で若者らしい地域の感じ方を語ってもらうなど、「人びとの生活や歴史をのせ、地域を可視化する」地図となりました。

午後からのフィールドワークでは専門的な解説だけでなく、参加者から地元の方ならではの話を聞くことができました。最後のグループディスカッションでは、地元外の参加者による「外からの視点」を加えながら意見が交わされました。災害の大型化、巨大地震や火山噴火が危惧される今日、災害大国に住む私たちは「災害にどう向きあうのか」が問われていると言えます。今こそ、災害という視点から地域を見つめ直す時ではないでしょうか。

RRM2017年度修了生の研究成果

地域資源マネジメント研究科は、本年3月に博士前期課程修了生、10名を送り出しました。そのうち本号では、ソシオ部門3名の研究成果の一端を紹介します。

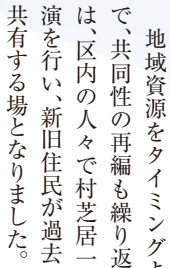
西垣 義嗣

所属・職業／FMジャングル パーソナリティー

混住地域における 共同性の再編の可能性

従来、農村地域では共同性は保たれ、安定した地域コミュニティが維持されてきました。しかし離農や来住者の増加による混住化は、住民の価値観の多様化をもたらし、住民間で紛争が起ることも珍しいことではなくなりました。混住地域では対処のために共同性の再編を繰り返さなければならなくなり、それはいまだ現代的な課題となっています。そこで、事例研究を通して共同性の再編の可能性について検討を行いました。

事例として取り上げた兵庫県豊岡市福田区では、地域資源を利用して継続的な共同性の再編を行っている工夫が確認されました。物的な資源に加え、自然や人のもつ知識、技能、記憶なども地域資源として捉えています。



「辻堂」前広場で生演奏での盆踊り

地域資源をタイミングよく繰り返し利用することで、共同性の再編も繰り返されます。「辻堂」の改修では区内の人々で村芝居一座を立ち上げ、「辻堂」で公演を行い、新旧住民が過去の記憶と共に新たな記憶を共有する場となりました。

福田区では、人々が地域資源を繰り返し利用しながら、「自分たちで自分たちの住む地域を、共に楽しく暮らせる舞台づくり」の手法を築いていると考えられます。つまり、自分たちの地域資源を、自分たちの力を引き出しながら利用することが、結果的には安定した共同性の再編に繋がる鍵となるのではないのでしょうか。

磯謙一郎

所属・職業／豊岡市役所

伝統産業としての出石焼 地域で価値を知り、地域で支える

「伝統産業」は、地方創生などの観点から近年注目を浴びています。豊岡市の伝統産業の一つである出石焼は、その歴史を通じて一貫して小規模な窯の産地です。現在は、窯元の個人経営化による従事者の減少に加え、職人の高齢化も進み、生産額の向上や後継者育成などが課題となっています。

その解決には、小規模な出石焼が200年以上の命脈を保ってきた特徴を考える必要があります。第一の特徴として、その歴史を通じて、柔軟に他地域からの技術導入や行政・地域などの連携を行ってきた点、第二にその歴史の中で出石焼＝白磁という製品イメージを確立した点、第三にて、現在産地が出石城下町の観光地内に立地している点があげられます。

そのような特徴を考えると、生産体制や後継者育成などと同等に重要なのは行政や地域も含めた一体的なつながりにあります。産業に地域振興という広い役割を担わせるのであれば、生産額や売り上げだけではなく、歴史や伝統技術などの産業自体が持つ地域社会と密接に関係するストーリーが重要になってきます。地域全体が出石焼の積み重ねてきた歴史的価値を共有し地域で支えていく事こそ、今後も産業が存続する道ではないのでしょうか。



地域の夏の風物詩となっている出石焼の風鈴

伝統産業が現代まで存続してきたということは、伝統産業と地域の自然、人が密接につながってきたことの証であり、伝統産業の課題の解決とは、地域の課題解決とも言えます。

岡山 慎

所属・職業／養父市役所

農村地域における 子どもの遊び空間 ― 集落広場の継承 ―

雑草だらけで遊具も錆び付いている広場は、私が幼い時に毎日のように遊んでいた広場でした。それを見てふと寂しく感じたことをきっかけに、始めた調査研究です。地域コミュニティや地域活動の衰退等の影響により、遊び空間の継続的な維持管理が懸念されるなか、集落広場を後世に受け継いでいくべきものとして捉え、地域計画の視点から研究に取り組みしました。

まず、子どもの遊び空間としての集落広場の現状を明らかにし、続けて子どもの利用実態とそれに影響する要因について分析しました。結果として、場所利用に関わる基本的な項目（維持管理の状況、遊具の有無、遊び空間としての認識）、集落における位置関係（中心性、安全性、連結性）、農村広場を利用した活動量および種類が、子どもの集落広場の利用に影響する要因として捉えられました。



日常的な遊び、イベントによく利用されている集落広場

そのうち例外的なものではありますが、地区に住む小学生以下の子どもの一人もいないのに遊具を新しく更新し、集落広場を利用した活動も積極的に行う地区がありました。少子高齢化による影響が田舎の子ども遊び環境の悪化にまで及んでいます。集落広場を子ども「遊び」だけでなく、大人の「遊び」をも許容する空間として住み続ける人たちが守っているケースがあります。そのような集落広場は、子どもの遊び空間、さらには集落を持続的なものへと変えていくためのひとつの鍵を握っていると考えられています。